

## レクリエーション運動の展開に関する一考察 — 個に視点をあてたプログラムの試み —

○宮下桂治（順天堂大学）木村博人（東京水産大学非常勤）戸田安信（船橋市自遊人協会）

### 個の時代 レクリエーション運動

#### I. はじめに

個人の生活をその人の価値感に従って自由に豊かな方向に動かしていくレクリエーション運動が求められてのに指導者養成では、団体型（集団型）指導を中心にしたレクリエーション指導者を養成してきたことが、いまだ「個」を支援するレクリエーションを実践に生かせない要因としてあげられる。

そこで、この実践にあたって、「楽しむためにレクリエーションをする」から「レクリエーションをすることが楽しい」というコンセプトで新しい運動展開を目指している。そのために、地域で実践されている多くのプログラムをこの様な考え方で実践するならばどのようにしたらよいか、実践活動を踏まえながら新しいレクリエーション運動の方法論を実証することが重要な課題である。

#### II. 実践研究の目的

市民の「個」を対象にし、個々のレベルで楽しめる活動であれば新しいレクリエーション運動のプログラムになることを実証する。

#### III. 展開の方法

ここに例としてあげるのは、参加者を「個」に絞り実践したものである。

##### 1. 実践までの経過

船橋市内のレクリエーション運動のプログラムを現状分析し、問題点を整理し問題解決の方策を決め、それを企画書に作成し主催者に積極的に提案をする方法をとった

##### 2. 実践上の手順

提案……直接的・間接的方法で主催担当者に企画書をもって提案する。

協力……提案が受け入れられた場合は、市民として協力する、ワーカーとして協力する、企画者として協力する等の方法を状況によってとる。

この例の場合は全て組織と一般市民ボランティアによる運営で試みた。

#### IV. 結果と考察

##### 1. 全市民規模のプログラム

年に1度の「スポーツの祭典」は、行政の主催事業に民間ボランティアの提案を採用されたものである。

##### 1) 自由参加

これまでは実施内容が関連団体に任せていたため、「野球をしようと野球場に行った子供が、君はジーパンだからダメと言ってやらせてくれなかった」そこには各各地から集まって来た少年野球の選手が有名人の指導で講習会を受けていた。このような実情を改善するため全体企画のコンセプトを「楽しく遊ぶ」とし、コンセプトから外れたものを除外するよう努めた。その結果、個が自由に参加出来た。

同時に運営スタッフも従来の団体を主体にした運営から、一般ボランティアを公募し実行委員や当日のスタッフに加えることによって団体のスタッフにボランティアの情熱ある行動力が伝わり、運営の活性化に良い影響を与えた。

## 2)参加のしやすさ(点から面への広がり)

「いつもの駅からウォークイン」をキャッチフレーズにして募集した。今までは、メイン会場へ直接参加していたが、市内28ある駅にウォークラリーの出発地点を設け市内全域からの参加できる条件にしたら参加者が倍増した。(約5,000名から13,000名)その結果、従来に比して車の来場者が減り駐車場の混雑さを避けることが出来た。

## 3)楽しさの演出

「楽しく遊ぶ」を全体のコンセプトとし、演出に当たった。

①個人が自由に出来る内容は多くの中から選択出来る。

②内容を自由に選択でき遊べる。

③選択内容はスポーツに限らず、見る・食べる・出会う・ふれ合う・語り合う等、従って、参加者から「ここに来て楽しかった」93.6%との回答を得た。

## 2.参加の機会を増やすプログラム

「レクリエーション村」も行政の主催事業だが民間ボランティアが提案した企画を採用されたプログラムである。(行政+民間ボランティアの運営)

### 1)同じ形式による年10回のプログラム

一回に多くの参加者を得ることも大切だが、参加者の全対数は増える。(一回に300名×10回=延べ約3,000名)

また一回だけのプログラムより、内容が楽しかったら繰り返して参加できるのが利点。(各種ニュースポーツ等、自分自身が主体的に出来る内容)

その結果、ニュースポーツの愛好者が増え、船橋市ペタンク協会・船橋市テニス協会・船橋市フライングディスク協会等の設立の契機になった。

### 3.自由に参加出来る競技会

ニュースポーツの全市大会に出場するためには、地域大会を勝ち残らないと進めないのが現状。このチャンピオンスポーツ方式を市民の個人の欲求を満たせる競技会に変えた例である。

フライングディスク協会では、一日の大会を次のようなスケジュールで行っている

①予選会・・・午前8時から午前10時

②自由参加・・・午前10時から12時(個人や家族で自由参加)

③決勝・・・午後1時から3時(男女別・クラス別・ハンディーキャップ制)

## V. まとめ

- 1.プログラムを、「個」にターゲットをあてたら個人が自由に楽しむ機会が作れた。
- 2.団体に所属しているスポーツ経験者より何もしていない市民の数が多いので、「個」をターゲットとして絞ったほうが参加者が多かった。
- 3.主催者・団体所属者・一般市民ボランティアが協働でき融和が計れ、以後の活動に有益性があった。従って生活者の立場にたち、「個」をターゲットにするプログラム展開が有益であることが認められた。